

有界閉区間上での畳み込みに関する注意 Ver.1.1

大阪大学大学院基礎工学研究科

平井祐紀

2020 年 4 月 21 日

更新履歴

2020.4.20 作成

2020.4.21 間違いや誤植をいくつか訂正

0 記号・用語

本ノートで使う記号や用語をいくつか用意する.

- λ : \mathbb{R} 上の Lebesgue 測度や, その Borel 集合上への制限.
- $\mathcal{L}^0(E)$: 可測空間 (E, \mathcal{E}) 上の実数値可測関数全体の集合.

1 有界閉区間 $[a, b]$ 上の関数の畳み込みの定義

まずは, \mathbb{R} 上の関数の畳み込みを定義する. 可測関数 $f, g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ に対して, 積分

$$f * g(x) = \int_{\mathbb{R}} f(x-t)g(t)\lambda(dt)$$

が定義できるとき, 写像 $x \mapsto f * g(x)$ を f と g の畳み込みといい, $f * g$ で定める.

一般に畳み込みは \mathbb{R} や \mathbb{R}^n 全体で定義されるが, 和について閉じていない有界区間 $[a, b]$ にも適用できるように, 畳み込みの定義を拡張しよう. 可測関数 $f: [a, b] \rightarrow \mathbb{R}$ に対して, その \mathbb{R} 上への拡張 \bar{f} を

$$\bar{f}(x) = \begin{cases} f(x) & x \in [a, b] \\ 0 & x \notin [a, b] \end{cases}$$

と定義する. このとき \bar{f} は \mathbb{R} 上の可測関数であり, $f \in L^1[a, b]$ と $\bar{f} \in L^1(\mathbb{R})$ は同値となる. また, 平行移動作用素 $\tau_h: \mathcal{L}^0(\mathbb{R}) \rightarrow \mathcal{L}^0(\mathbb{R})$ を $\tau_h f(x) = f(x+h)$ によって定める. これらの準備の下, 可測関数 $f, g: [a, b] \rightarrow \mathbb{R}$ に対して $f * g = (\tau_a \bar{f}) * \bar{g}|_{[a, b]}$ と定義し, $f * g$ を f と g の畳み込みと呼ぶことにする.

2 基本的な性質

よく知られているように, \mathbb{R} 上の関数の畳み込みでは適当な可積分性のもと $f * g = g * f$ が成り立つ. これは変数変換による計算で確かめることができる. 同様に, $[a, b]$ 上の関数についても $f * g = g * f$ が成

り立つことに注意しておく.

命題 2.1. $1 \leq p \leq \infty$ とする. $f \in L^p(\mathbb{R})$ かつ $g \in L^1(\mathbb{R})$ とすれば $f * g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は well-defined で, $\|f * g\|_{L^p(\mathbb{R})} \leq \|f\|_{L^p(\mathbb{R})} \|g\|_{L^1(\mathbb{R})}$ が成り立つ. 特に, $f * g \in L^p(\mathbb{R})$ である.

証明. **Step 1:** $p < \infty$ の場合. $f \in L^p(\mathbb{R})$ かつ $g \in L^1(\mathbb{R})$ が成り立っていると仮定する. $\|g\|_{L^1(\mathbb{R})} = 0$ ならば命題の主張は明らかなので, $\|g\|_{L^1(\mathbb{R})} > 0$ であるとして示す. $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対して

$$\mu(A) = \int_A \frac{|g(t)|}{\|g\|_{L^1(\mathbb{R})}} \lambda(dt)$$

と定義すれば, μ は $\mathcal{B}(\mathbb{R})$ 上の確率測度である. したがって, Jensen の不等式より,

$$\begin{aligned} \left(\int_{\mathbb{R}} \left| \tau_a f(x-t) \frac{|g(t)|}{\|g\|_{L^1(\mathbb{R})}} \right| \lambda(dt) \right)^p &= \left(\int_{\mathbb{R}} |\tau_a f(x-t)| \mu(dt) \right)^p \\ &\leq \int_{\mathbb{R}} |\tau_a f(x-t)|^p \mu(dt) \\ &= \int_{\mathbb{R}} |\tau_a f(x-t)|^p \frac{|g(t)|}{\|g\|_{L^1(\mathbb{R})}} \lambda(dt) \end{aligned}$$

が成り立つ. これより,

$$\left(\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)g(t)| \lambda(dt) \right)^p \leq \|g\|_{L^1(\mathbb{R})}^{p-1} \int_{\mathbb{R}} |\tau_a f(x-t)|^p |g(t)| \lambda(dt) \quad (1)$$

となるので, 右辺の積分を調べれば良いことがわかる. いま

$$\int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)|^p |g(t)| \lambda(dx) \right) \lambda(dt) = \|f\|_{L^p(\mathbb{R})}^p \|g\|_{L^1(\mathbb{R})} < \infty$$

であるから, Tonelli の定理により

$$\int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)|^p |g(t)| \lambda(dt) \right) \lambda(dx) < \infty$$

がわかる. このことと (1) の評価を用いれば,

$$\begin{aligned} \int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)g(t)| \lambda(dt) \right)^p \lambda(dx) &\leq \|g\|_{L^1(\mathbb{R})}^{p-1} \int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)|^p |g(t)| \lambda(dt) \right) \lambda(dx) \\ &= \|f\|_{L^p(\mathbb{R})}^p \|g\|_{L^1(\mathbb{R})}^p \\ &< \infty \end{aligned}$$

となり, 畳み込みが well-defined であることと目的の不等式を得る.

Step 2: $p = \infty$ の場合. この場合は, より素朴な評価

$$\int_{\mathbb{R}} |f(x-t)g(t)| \lambda(dt) \leq \|f\|_{L^\infty(\mathbb{R})} \|g\|_{L^1(\mathbb{R})} \quad \text{for a.a. } x \in \mathbb{R}$$

を用いればよい. □

系 2.2 ($[a, b]$ 上での Young の不等式). $1 \leq p \leq \infty$ とする. $f \in L^p[a, b]$ かつ $g \in L^1[a, b]$ なら $f * g: [a, b] \rightarrow \mathbb{R}$ は well-defined で, $\|f * g\|_{L^p[a, b]} \leq \|f\|_{L^p[a, b]} \|g\|_{L^1[a, b]}$ が成り立つ. 特に, $f * g \in L^p[a, b]$ である.

証明. 命題 2.1 と $[a, b]$ 上の関数に関する畳み込みの定義より,

$$\|f * g\|_{L^p[a, b]} = \|(\tau_a \bar{f}) * \bar{g}\|_{L^p(\mathbb{R})} \leq \|\tau_a \bar{f}\|_{L^p(\mathbb{R})} \|\bar{g}\|_{L^1(\mathbb{R})} = \|f\|_{L^p[a, b]} \|g\|_{L^1[a, b]}$$

が成り立つ. □

畳み込みの関数の一方が連続であるような場合に, 畳み込みがどうなるかを見てみよう.

命題 2.3. $f \in C[a, b]$ かつ $g \in L^1[a, b]$ であるとする. このとき, $f * g \in C[a, b]$ が成り立つ.

証明. $\|f\|_{C[a, b]} > 0$ かつ $\|g\|_{L^1} > 0$ であるとして示せば十分である. 始めに, $g \in L^1[a, b]$ かつ $f \in C[a, b]$ なら全ての $x \in [a, b]$ について

$$|(f * g)(x)| \leq \|g\|_{L^1[a, b]} \|f\|_{C[a, b]}$$

が成り立つことに注意しておく. $x \in [a, b]$ を固定する. このとき $x + h \in [a, b]$ を満たす任意の h に対して,

$$(f * g)(x + h) - (f * g)(x) = \int_{\mathbb{R}} \{\bar{f}(x + h - t) - \bar{f}(x - t)\} \tau_a \bar{g}(t) dt \quad (2)$$

が成り立つ. 積分区間を分割することで, (2) 右辺の積分を評価してみよう.

$\varepsilon \in]0, 1]$ を任意に固定する. f は $[a, b]$ 上一様連続だから, $\delta_1 > 0$ を以下の条件を満たすように選ぶことができる.

$$y, z \in [a, b] \wedge |y - z| < \delta_1 \implies |f(y) - f(z)| < \frac{\varepsilon}{2\|g\|_{L^1[a, b]}}.$$

また, g の可積分性に注意して, δ_2 を以下の条件を満たすように選ぶ.

$$E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}) \wedge \lambda(E) < \delta_2 \implies \int_E |\bar{g}| d\lambda < \frac{\varepsilon}{4\|f\|_{C[a, b]}}$$

以下, h は $|h| < \delta_1 \wedge \delta_2$ を満たすものと仮定しよう.

Case 1 : $x + h - t, x - t \in [a, b]$ の場合. この場合は f が良い評価を持つので, それを用いる. h の選び方より

$$\int_{\mathbb{R}} 1_{[x-b, x-a] \cap [x+h-b, x+h-a]}(t) \{\bar{f}(x + h - t) - \bar{f}(x - t)\} \tau_a \bar{g}(t) dt \leq \frac{\varepsilon}{2\|g\|_{L^1[a, b]}} \|\bar{g}\|_{L^1(\mathbb{R})} = \frac{\varepsilon}{2}$$

が成り立つ.

Case 2 : $x + h - t, x - t \notin [a, b]$ の場合. この場合はそもそも \bar{f} は 0 なので, ややこしいことは何も起こらない. 関数 f の拡張方法より,

$$\int_{\mathbb{R}} 1_{[x-b, x-a]^c \cap [x+h-b, x+h-a]^c}(t) \{\bar{f}(x + h - t) - \bar{f}(x - t)\} \tau_a \bar{g}(t) dt = 0$$

である.

Case 3 : $x + h - t, x - t$ のどちらかのみが $[a, b]$ に入っている場合. この場合は, f 自体にそこまですべてよい評価はないので, 区間の大きさで評価する. 集合 $[x - b, x - a] \setminus [x + h - b, x + h - a]$ および $[x + h - b, x + h - a] \setminus [x - b, x - a]$ はともに測度が $|h|$ で評価できることに注意しよう. このとき

$$\begin{aligned} & \int_{\mathbb{R}} 1_{[x-b, x-a] \setminus [x+h-b, x+h-a] \cup [x+h-b, x+h-a] \setminus [x-b, x-a]}(t) \{\bar{f}(x + h - t) - \bar{f}(x - t)\} \tau_a \bar{g}(t) dt \\ & \leq \|f\|_{C[a, b]} \left(\int_{[x-b, x-a] \setminus [x+h-b, x+h-a] \cup [x+h-b, x+h-a] \setminus [x-b, x-a]} |g(t)| dt \right) \\ & \leq \|f\|_{C[a, b]} 2 \frac{\varepsilon}{4\|f\|_{C[a, b]}} = \frac{\varepsilon}{2} \end{aligned}$$

が成り立つ。ただし、一つ目の不等号は δ_1 の選び方より、二つ目の不等号は δ_2 の選び方よりわかる。

以上の議論をまとめれば、 $x, x+h \in [a, b]$ かつ $|h| < \delta_1 \wedge \delta_2$ ならば

$$|(f * g)(x+h) - (f * g)(x)| \leq \varepsilon$$

となることがわかる。したがって、 $f * g$ は $[a, b]$ 上で連続である。 \square

3 Riemann-Liouville 積分作用素への応用

Riemann-Liouville 積分作用素を、畳み込みを用いて表現してみよう。Riemann-Liouville 積分作用素は、以下のように定義されるのであった。

$$J_a^\alpha f(x) = \frac{1}{\Gamma(\alpha)} \int_a^x (x-t)^{\alpha-1} f(t) dt. \quad x \in [a, b]$$

ただし、 $\alpha \in \mathbb{R}_{>0}$ である。これを畳み込みで書くために、関数 $\varphi_\alpha: [a, b] \rightarrow \mathbb{R}$ を以下のように定義する。

$$\varphi_\alpha(x) = \begin{cases} (x-a)^{\alpha-1} & x \in]a, b] \\ 0 & x = a \end{cases}$$

よく知られているように、 $\varphi_\alpha \in L^1[a, b]$ が成り立つ。この記法を用いれば、十分良い可積分性の下で

$$\begin{aligned} (\varphi_\alpha * f)(x) &= \int_{\mathbb{R}} \tau_a \overline{\varphi_\alpha}(x-t) \overline{f}(t) dt \\ &= \int_{[a, b]} \overline{\varphi_\alpha}(x+a-t) f(t) dt \\ &= \int_{[a, b]} 1_{[0, \infty[}(x-t) \varphi_\alpha(x+a-t) f(t) dt \\ &= \int_{[a, b]} 1_{[a, x]}(t) (x-t)^{\alpha-1} f(t) dt \end{aligned}$$

計算できる。したがって、 $J_a^\alpha f = \varphi_\alpha * f$ という表現が得られた。Riemann-Liouville 積分作用素が畳み込みで得られることがわかったから、これに前節の結果を適用することが可能となる。

命題 3.1. $f \in L^1[a, b]$ なら、 $J_a^\alpha f \in L^1[a, b]$ となる。

証明. 系 2.2 において $p = 1$ と置けばよい。 \square

命題 3.2. $f \in C[a, b]$ ならば、 $J_a^\alpha f \in C[a, b]$ が成り立つ。

証明. 命題 2.3 より直ちにしたがう。 \square

References

- [1] Donald L. Cohn. *Measure theory*. 2nd ed. Birkhäuser Advanced Texts Basler Lehrbücher. Birkhäuser, 2013. DOI: [10.1007/978-1-4614-6956-8](https://doi.org/10.1007/978-1-4614-6956-8). URL: <https://www.springer.com/la/book/9781461469551>.

- [2] Emmanuele DiBenedetto. *Real Analysis*. 2nd ed. Birkhäuser Advanced Texts Basler Lehrbücher. Birkhäuser Basel, 2016. DOI: [10.1007/978-1-4939-4005-9](https://doi.org/10.1007/978-1-4939-4005-9). URL: <http://www.springer.com/us/book/9781493940035>.
- [3] Kai Diethelm. *The Analysis of Fractional Differential Equations. An Application-Oriented Exposition Using Differential Operators of Caputo Type*. Lecture Notes in Mathematics 2004. Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 2010. ISBN: 978-3-642-14574-2. DOI: [10.1007/978-3-642-14574-2](https://doi.org/10.1007/978-3-642-14574-2).
- [4] Gerald B. Folland. *Real Analysis: Modern Techniques and Their Applications*. 2nd ed. John Wiley & Sons, 1999.